

研究ノート

石造物にみる裁縫師匠 —幕末から明治の千葉県を事例として—

鳥立 理子

千葉県立中央博物館

〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2

1 はじめに

山川菊江の『武家の女』は、安政4年(1857)に水戸藩下級武士の子として生まれた菊江の母、青山千世の半生をえがいたものである。その中に千世は7歳で手習いを習いはじめ、13歳で裁縫のお師匠さんについて裁縫を習いはじめたことが書かれている。そのお師匠さんは、身分の低いごく貧乏な、老藩士のおくさんであったという。

また、幕末の随筆『近世風俗志』には「京坂にありて江戸にこれなき所の生業」の一つとして「裁縫師匠」がとりあげられている。「京坂の童女13、4以下、書筆を学ばせ、その後は裁縫の師匠に通はしてこれを習わしむ。号けてぬひものやと云ふ。多くは寡婦等の業とす。」⁽¹⁾とある。京都、大坂では、13、4歳まで女の子は読み書きを習い、その後は裁縫の師匠のもとに通い裁縫をならっていた。また、師匠の多くは寡婦であった。

裁縫は人の生活の基本である衣食住の一つ、衣類の調整である。仕立てを生業とする職人、仕立師は別として、日常的な衣類の調整は、家の中で親から子へと伝えられてきたものであろう。それが、いつの頃からか「他人の手で」仕込まれるようになった。上記二例から幕末の都市部においては、武家や商家の女の子は、13、4歳頃からは裁縫の師匠の元に通っていたことがわかる。

しかし、農村部や小さな町場などではどうだったのだろうか。千葉県内各地には「筆子塚」

と呼ばれる、近世から近代はじめにかけての、読み書きの師匠の墓碑や顕彰碑が数多く確認されている。師匠の教え子(筆子)たちが師匠の徳に感謝し、建立したもので、建立者として「筆子中」「弟子等」「門人中」と刻まれている。また、師匠の人となりなどが刻まれたものもある。

これらの筆子塚のなかに、「針子中」「縫子中」と刻まれた、針子たちが裁縫の師匠の徳に感謝し建立したのがある。それにより、裁縫師匠の人となり、弟子たちの数など、当時の裁縫塾の様子をかいま見ることができる。

筆者はこれまで、聞き取りや裁縫教授の場で作られた裁縫雛形などの資料をもとに、明治末から昭和にかけての裁縫塾について検討してきた。⁽²⁾裁縫塾は私塾であるため、記録類が残りにくい。また、聞き取り調査で遡る事が可能なのは、昭和はじめ頃までであり、裁縫教育の変革期、明治初期の裁縫塾について検討することは難しい。

石造物は、幕末・明治初期の、空白の時期をうめてくれる資料となり、文献などの記録に残らない師匠の存在を明らかにし、当時の裁縫師匠について知る手がかりとなる。

千葉県内の「筆子塚」については、川崎喜久男氏の労作がある。氏は県内の筆子塚の悉皆調査を行い、その成果は『筆子塚の研究』⁽³⁾としてまとめられている。

本稿では、これを参考としながら、幕末から明治にかけての千葉県内の裁縫師匠について検

表1 千葉県内裁縫師匠関連石造物

No.	所在地		墓碑銘	性別	没年		建立年		建立主体	碑文	備考
	町名	寺名			西暦	和暦	西暦	和暦			
1	横芝町木戸台	増福寺	了義順性信士	男	天保3年4月20日	1832			縫物弟子中		弟子92人中 女子19名
			妙空了然信女	女	慶応元年12月1日	1865					
2	栄町布太	双林寺	小島雄玄	男			元治2年3月	1865	箆子・把針子	有	
			小島雄玄妻	女			元治2年3月	1865			
3	小見川町下小堀	浄福寺	鎌形トラ	女			明治8年1月10日	1875	裁縫弟子中	有	82才で没
4	横芝町木戸台	増福寺	眞性院心日道法信士	男	慶応元年11月4日	1865			箆弟・縫物中		
			眞深院妙林自徳信女	女			明治10年8月	1877			
5	茨城県船廠郡東町砂押	祥雲寺	智縫貞貫大姉	女			明治14年6月14	1881	針子中		
6	野栄町川辺	薬師寺	裁縫碑	女			明治16年4月	1883	縫子中		
7	小見川町分郷	導慶寺	内山かよ	女			明治16年5月	1883	女弟子中	有	60才で没
			内山政七	男							
8	勝浦市南山田	大法寺	ツネ	女	明治19年1月27日	1886			村ヲハリコ	有	
9	小見川町小見川	善光寺	大久保千代	女	明治20年1月	1887			裁縫弟子中	有	
10	佐倉市上座	宝樹院	明願了音尼首座	女			明治20年9月27日	1887	裁縫子供中		
11	東金市台方	妙福寺	好縫院浄衣信士	男			明治21年2月	1888	裁縫弟子中		
		妙福寺	隋縫院妙裳信女	女			明治21年2月	1888			
12	八日市場市西高野	農村協同館	成光院貞徳大姉	女			明治24年5月	1891	(針子)	有	
13	君津市南子安	稲荷神社	小柴重治	男			明治24年7月1日	1891			
14	栄町須賀	虚空藏堂	宇山婦乃墓	女			明治25年	1892	門人等	有	
15	鴨川市広場	鏡忍寺	川上源藏	男	明治30年4月20日	1897			針子中		65才で没
16	我孫子市布佐		大井い□	女	明治31年旧1月25日	1898			針子中		
17	山田町府馬	修徳院	浄善院光善妙歌清大姉	女			明治31年旧8月	1898	針子中		
18	多古町南中	南中墓地	華光院妙顔日貞大姉	女	明治33年10月10日	1901			針子中		
19	佐原市野間谷原	共同墓地	眞如院貞操妙音信女	女			明治34年4月	1902	裁縫中		
20	芝山町山中	徳藏寺	吉川はる子	女			明治43年12月	1910	裁縫門弟中		
21	小見川町下小堀	浄福寺	裁縫教師伊藤安子之碑	女	明治34年		大正元年1月	1912	門人		84才で没
22	八千代市米本	逆水墓地	土屋美都子	女			大正10年2月10日	1921	寄附者	有	
23	東庄町小南	蔵福寺	宇井八郎右衛門妻(裁縫妙縫信女)	女					弟子中		

(川崎喜久夫『箆子塚の研究』多賀出版株式会社 1992 『箆子塚資料集成 - 千葉県・群馬県・神奈川県 -』国立歴史民俗博物館 2001 から作成)

討する。

2 千葉県内における「針子」「縫子」建立の石造物

『筆子塚の研究』等から、県内の裁縫師匠のために建てられたと考えられる石造物は表1の23基である。

これらの石造物23基には「縫物弟子中」「把針子中」「縫物中」「針子中」「縫子中」「門人」「村ヲハリコ」「裁縫子供」「女弟子中」など、建立した集団の名称が刻まれている。「門人」「女弟子」と刻まれているものについては、碑文等で裁縫を教えていたことが確認できるものに限った。弟子が女性だけだからといって、必ずしも裁縫を教えていたとは限らない。

分布は香取地区にかたよっているが、裁縫師匠がこの地域だけに多かったとは考えにくい。石造物を建立する習慣の有無などの理由が考えられる。ちなみに、裁縫の上達を祈願して奉納された絵馬の分布は山武地方にかたよっている⁽⁴⁾。

石造物に刻まれた師匠の没年、あるいは建立年で一番古いものが、横芝町木戸台増幅寺にある、天保3年(1832)没の了義順性信士の墓石で、最も新しいものが八千代市米本にある、土屋美都子のために大正5年(1912)に建てられた顕彰碑である。

23基中、夫婦同墓のものが4基あり、石造物に刻まれた師匠名は27名で、男性が7名、女性が20名である。

表中の2、4は夫婦同墓で「筆子・把針子」の連名で建立されており、夫が手習いの師匠、妻が裁縫の師匠だったとも考えられる。

一方で、表中の1、7、11は夫婦で裁縫を教えていたと考えられる。11は夫婦ともに法名に「縫」という字が使われていることから、2人とも裁縫の師匠であったことがわかる。7について詳しくは後述するが、夫、内山政七は江戸で裁縫を学んでいる。他に13、15は男性の裁縫師匠のために建てられたものである。

また、全23基のうち8基に碑文が刻まれており、ここから多くの情報を得ることができる。

3 師匠の技術習得

師匠はどこでどのようにして裁縫の技術を習得したのだろうか。表中の③、⑦、⑬の師匠は、仕立職人のもとで技術を習得した。

資料1 表中③ 師匠名 鎌形トラ

(前略) 十二歳ノ時仕立物ノ師ニ随テ晝夜丹精ヲ盡シ十五歳ニ至テ一女子ヲ導ク年々歳々ニ及テ女子来テ指ヲ乞我及バザレドモ女子ヲ導ク事ヲ念トス二十三歳ノ時鎌形氏ノ妻トナリ明治八乙亥年ニ至テ歳八十二歳弟子百八十有餘人(後略)⁽⁵⁾

資料2 表中⑦ 師匠名 内山政七 内山かよ

(前略) 幼勤穎悟ユ妙裁縫自年少出江都及壯專業裁縫爰有年(中略) 明治元年新設一家於分郷村又以裁縫為業授業弟子日進月盛而溢門若干為妻平山氏同郡飯高村平山清兵衛三女也性質溫柔復能俱導子弟其德風顯四方(後略)⁽⁶⁾

資料3 表中⑬ 師匠名 小柴重治

(前略) 年十二学裁縫術八年術成乃延縣内兒女教之其授業四十八年入門者殆千人(後略)⁽⁷⁾

資料1の鎌形トラは、12歳から15歳までの3年間「仕立物ノ師」のもとで、晝夜丹精して裁縫の技術を身につけている。鎌形トラの墓石に刻まれた建立者は「縫物弟子中」となっており、「仕立物弟子中」ではない。トラは「縫物師匠」であり、「仕立物ノ師」ではないようだ。「裁縫」と「仕立」の言葉の違いであるが、『近世風俗志(守貞謾稿)(一)』「裁縫師匠」の項に「三都ともに雇銭をもって裁縫を業とする工あり。これは仕立屋と云うなり」⁽⁸⁾とある。

「仕立」という言葉には、裁縫のプロとしての職人という意味が込められていると考えられる。トラは仕立職人のもとの裁縫の技術を習得したと考えてよいだろう。

資料2の内山政七は、江戸へ出て裁縫を学んだ後、仕立を仕事としていたが、明治元年(1868)に小見川へ帰り、仕立のかたわら裁縫を教えた。政七の妻かよも、弟子の指導を行ったようであるが、かよが何処で裁縫技術を身につけたかはわからない。

資料3の小柴重治は12歳から8年間裁縫を学び、技術を習得した後、48年間にわたり、児女に裁縫を教えた。小柴重治については、『千葉縣教育史』巻1⁽⁹⁾に「子安坂裁縫塾」として記載され、師匠は重治と妻まつ、生徒の数は女40人となっている。内山かよ同様、まつがどこで、どのようにして裁縫技術を身につけたかはわからない。

また、武士階層の出身だった師匠もいる。

資料4 表中22 師匠名 土屋美都子

美都子者舊佐倉藩士林為五郎之長女也文久三年頃二十五歳嫁於印旛郡阿蘇村米本農土屋文右衛門(中略)美都子能裁縫每歳巨冬春集近郷之婦女子而教授五十餘年于茲浴其恩患者實不知幾百人(後略)⁽¹⁰⁾

土屋美都子は旧佐倉藩士の娘で、25歳の時に印旛郡阿蘇村米本の農家に嫁いだ。裁縫が得意だったので、毎年冬から春にかけて近郷の女子を集めて裁縫を教えた。美都子がどこで裁縫技術を身につけたかは書かれていないが、『武士の女』の千世のように、手習いの後、13、4歳から嫁ぐまでの間に裁縫師匠のもとに通ったのであろう。

次の資料5の大久保千代は武士階層の出身ではないが、武家とのかかわりが、裁縫師匠としての箔につながった例である。

資料5 表中9 師匠名 大久保千代

姓大久保名千代香取郡小見川人幼好書籍又通和歌才不?齡十有二而為堀田備中守殿医佐藤尚中之養女年十有四歳被舉松姫於奥仕使與松姫共学武術茶湯等勤仕六年辭職而嫁同藩於宇津木氏産二男二女明治三年夫彦太郎病而没此時踰立齡三年使長男郡八嗣家世維新之際轉移故園於小見川新築一家屋更養下飯田村人於徳造妻二女時付之以為主又寄寓久保村高橋氏教琴連歌傍教授裁縫以為老後之樂云云⁽¹¹⁾

大久保千代は、幼い頃から書籍や和歌に通じ、10歳で佐倉藩主堀田備中守(堀田正陸)の藩医佐藤尚中の養女となり、その後6年間、堀田正陸の息女松姫のもとで奥使えをした。後年、そこで身につけた琴、連歌を教えるかたわら、裁縫も教えて「老後之樂」としたという。

佐藤尚中はもと山口舜海といい、小見川藩主内田氏の藩医山口再仙の次男として生まれた。医学塾順天堂を佐倉に開いた佐藤泰然に入門し、その後泰然の養子となり、後に、東京湯島に順天堂医院を開いた人物である。

4 師匠の教えていた時代

これら師匠たちが裁縫を教えていたのは、幕末からの明治にかけての約100年間である。

具体的な例を見ると、一番古い表中1の法名「了義順性信士」、「妙空了然信女」は没年が天保、慶応である。

表中3の鎌形トラは明治8年(1875)年に82歳を迎えている。碑文には15歳で裁縫を教えはじめたとあり、文化年間から明治のはじめの60年間にわたって裁縫を教えていたことになる。

表中14の宇山うらは、明治25年(1892)に50歳を過ぎている。いつ頃から裁縫を教えていたかはわからないが、幕末維新时期には裁縫師匠をしていたと考えてよいだろう。

22の土屋美都子は、文久3年(1863)に嫁いでから50数年間近郷の婦女子に裁縫を教えていた。その時期は、幕末から維新、明治、大正となる。

多くの師匠は幕末から維新、明治前半という激動の時代を裁縫師匠として過ごした人たちである。この時期は、裁縫教育にとっても大きな変革の時代でもあった。

明治5年(1872)太政官布告第213号「仰出書」、いわゆる学制が發布され、男女の別なく小学校8年間で義務教育となった。学制は、男女共通の内容で教育を行なうように定めているように見えるが、但し書きとして地域の実情にあわせて「女子小学」が規定されていた。

千葉県では、明治6年(1873)に「小学規則および小学教則」を定め、「女子ニハ上等教科ヲ省略シ、紡績裁縫等ノ女工ヲ教授スル事アルベシ」として教科の一つとして「裁縫」を規定している。このように基本的には男女共学の方針をもって、県「小学規則」を定め、その中に「裁縫」を導入したのは他県に例をみないという⁽¹²⁾。

その後、明治12年(1879)の太政官布告第40号、いわゆる「教育令」では、小学校に「女子の為には裁縫等の科をおくべし」とし、裁縫科が女子の必修科目となった。このような中で、裁縫師匠の中には小学校の裁縫科の教員として登用される人もあった。東京家政大学の創始者渡辺辰五郎は、弘化元年(1844)に現在の千葉県長南町に生まれ、江戸の仕立屋で裁縫を学び、明治元年(1868)に長南へ帰り、仕立屋の傍ら裁縫の教授をはじめた。そして、明治7年(1874)からは長南小学校の裁縫科で、明治11年(1878)からは鶴舞小学校でも裁縫を教えるようになり、その後、千葉師範学校、東京女子師範学校の裁縫科の教員を歴任し、共立職業学校(現共立女学校)、渡辺裁縫女学校(現東京家政大学)の創設に携わった。

裁縫教育の父と呼ばれる渡辺辰五郎も、裁縫

師匠の一人であった。

5 師匠が教えていたもの

碑文は師匠の徳を讃えるために書かれるものである。つまり、裁縫師匠として期待された人物像が描かれていると考えてよいだろう。そのことをふまえて、碑文を読むと、裁縫師匠に期待されたのは、単なる日常の裁ち縫いの技術だけではなかったことがわかる。

表中12の八日市場農村協同館にある、法名「成光院貞徳大姉」の墓石には、そのあたりのことがよく書かれている。

資料6 表中^⑫ 師匠名 染女(法名:成光院貞徳大姉)

裁縫を以て婦女子に傳ふるもの有ありて未だ曾て婦道を見女子に教るものあるを聴さる也染女能此二つを以隣里の幼女に傳ふ近世の婦女子口に高尚を唱ひてこころに其事を忘るる事あるが如くす嗚呼是らの輩をして此女の風をきかしめれば所謂賢妻慈母の風に薰陶せられ□□⁽¹³⁾

裁縫を教える者は多くいるが、婦道を教える者は少ない。染女は裁縫だけを教えたのではなく、裁縫を通して近隣の婦女子に、「婦道」を伝えた。このことが、賢妻慈母の風として讃えられている。

表中13の小柴重治の石碑建立時のあいさつには次のようにある。「(前略)小柴翁茲二見ルアリ或ハ縫裁ノ術ヲ教ヘ或ハ礼儀作法ヲ正フシ諄々能ク婦女ヲ導キ淑徳ヲ修メシム故ヲ以テ、一タヒ翁ノ門ヲ過ギルモノ皆良母トナリ賢妻タラザルハナシ(後略)」⁽¹⁴⁾。小柴重治もまた、裁縫技術を教える事によって、婦女を良母賢妻へと導いた。

また、大久保千代の碑文には「琴連歌傍教授裁縫」とあり、松姫のもとで身につけた琴や連歌なども教えていた。琴や連歌といった、農村

での実生活とは直接結びつかない、「教養」を教授していたという点は注目できる。

八千代市吉橋貞福寺境内墓地内には、「插花門人一百余 安原三左エ門」と刻まれた、嘉永5年（1852）没の生け花師匠の墓石がある⁽¹⁵⁾。琴、連歌、生け花などの師匠が農村部にもいたことがわかる。

6 象徴としての「裁縫」

一師匠が伝えた「婦道」一

裁縫を習うということは、日常に必要な技術を身につけることだけではなかった。裁縫の師匠からは「婦道」を伝えられることも期待されていた。この「婦道」とは何であろうか。

表1の⑭宇山うらの墓石には次のように刻まれている。

資料7 表中14 師匠名：宇山うら

うら女は南相馬郡布佐なる葛生東卓の次女にして大須賀五郎右衛門に來しより貞操欠くることなくたちぬひのわさをしえてなりハひとせり（後略）⁽¹⁶⁾

「たちぬひのわさをしえ」た事だけではなく、「貞操欠くることなく」という女性として「正しい」生き方をしてきたことが賛美の対象となっている。

資料2の内山かよについて、碑文では「性質溫柔復能俱導子弟其德風顯四方」と讃えている。性格がおだやかで、夫を支えたことが賛美されている。これもひとつの「婦道」と考えられる。

女子に「婦道」を教えたのは、裁縫師匠だけでなく、手習いの師匠もまた、女子に対しては「婦道」を教えていた。

山武市姫島に、文政4年（1821）生まれの鈴木美和という手習い師匠の墓がある。

資料8 師匠名 鈴木美和（成東町姫島 共同墓地） 明治10年9月16日建立

（前略）自幼能讀書寫字因從來之遺澤篤信聖賢之道而頗有所得焉紡績織經以為任事夫致婦道導子弟盡愛顧不厭艱難勤勞不飾衣服制器常教後生為鄉里所重門人受業者以百算（後略）⁽¹⁷⁾

鈴木美和は幼い頃から読書、写字が得意で、これらを教える事を通して、「婦道」を伝えた。その「婦道」の中身は、「紡績織経」、糸を紡ぎ機を織ること任事とし、苦難や勤勞を厭わず、衣服など飾らないこととある。

手習いの場において、男子と女子では教育内容に相違のあったことは知られている。江戸時代における女子教育は、「女大学」「女今川」などの教訓型往来物に象徴される、中国の儒教倫理の影響を強く受けた、独自の教育理念によっていた。⁽¹⁸⁾ 碑文等に出てくる「婦道」もこの理念に基づくものであろう。

しかし、これらの教育理念は「武士」階層の女性の特殊な地位に起因するものである。武士階層の女子と町人や農民の女子とでは、期待される役割がおのずと違っていたはずである。しかしながら、碑文で見える限りは、農村部における裁縫教授の場、手習いの場でも「婦道」の涵養が賛美されている。

7 まとめ

千葉県内の石造物からあきらかになった、幕末明治期の裁縫師匠像についてまとめる。

『武家の女』の青山千世の通った裁縫の師匠のもとへは、武士の娘だけではなく、町人の娘の一緒に通っていたと書かれている。武士階層の女子への教育が、城下町水戸の町人の女子へも広がっていたことがわかる。

大久保千代や鈴木美和といった「婦道」に通じる師匠たちの存在は、幕末維新期には農村部においても、裁縫を習いに通うことのできる女子がいた事を示している。

武士階層の女子への教育の理念が、町人だけ

でなく、農民の女子へも広がっていたことを示している。

しかし、資料4の土屋美都子の碑文には、「毎歳巨冬春集近郷之婦女子而教授」とあり、美都子は冬から春にかけての農閑期のみ裁縫を教えていた。農村という場所柄にあわせて教授されている。実際の教授の場におけるその内容、特に「婦道」との関係については検討を要するだろう。

今回は考察することはできなかったが、以下の二点について簡単にふれておきたい。

表中2、4の師匠たちは、夫が手習いを、妻が裁縫を教えていた。また、現君津市根本に明治のはじめにあった江尻塾も夫が手習い、妻が裁縫を教えていたという⁽¹⁹⁾。手習いと裁縫が同じ場所で教えられており、この両者の関係について考えてみる必要があるだろう。

もう一点として、「婦道」を伝える裁縫師匠だけでなく、仕立職人の養成をしている師匠の存在である。表中の1の墓石の建立者である縫物弟子は男子73名に対して、女子19名と圧倒的に男子の数が多く、縫物弟子は仕立職人を目指していたと考えられる。男子の弟子の場合はもちろん、女子の場合でも「婦道」の一環としての「裁縫」ではなく、職業としての裁縫を教わっていた可能性がある。

裁縫の技術を学ぶ事は、女性の自活の為の手段にも成り得たのである。「婦道」は武家の妻のための教育理念であり、職業としての裁縫とは別ものである。同じ「裁縫を教える場」であっても、これら二つの指導内容は違ってはいたはずであり、この両者は別に検討する必要がある。

- (1) 喜田川守貞 『近世風俗志(守貞謄稿)(一)』岩波書店(岩波文庫版)1996
- (2) 島立理子 「ひながたにみる明治末千葉県佐原の裁縫所」(『民具マンスリー』32-2 神奈川大学日本常民文化研究所 1999)、島立理子「『むら』の裁縫所」(『町と村調査研究』

第3号 千葉県立房総のむら 2000)、島立理子「『まち』の裁縫所-その特色と役割-」(『民具研究』128号 日本民具学会 2003)、島立理子「針供養の変容と裁縫を教える場の終焉-千葉県佐原の事例から-」(『千葉県立中央博物館研究報告-人文科学-』8-2 2004) など

- (3) 川崎喜久夫 『筆子塚の研究』多賀出版株式会社 1992
- (4) 千葉県内の絵馬については、千葉県教育委員会『千葉県文化財実態調査報告書-絵馬・奉納額・建築彫刻-』1996に詳しい。
- (5) 川崎喜久夫 『筆子塚の研究』多賀出版株式会社 1992 p506
- (6) 川崎喜久夫 『筆子塚の研究』多賀出版株式会社 1992 p527
- (7) 筆者調査
- (8) 喜田川守貞 『近世風俗志(守貞謄稿)(一)』岩波書店(岩波文庫版)1996
- (9) 千葉県教育会『千葉県教育史』巻一 青史社 1979(1935年の復刻)
- (10) 川崎喜久夫 『筆子塚の研究』多賀出版株式会社 1992 p415
- (11) 川崎喜久夫 『筆子塚の研究』多賀出版株式会社 1992 p536
- (12) 高野 俊 『明治初期女児小学の研究』大月書店 2002年
- (13) 川崎喜久夫 『筆子塚の研究』多賀出版株式会社 1992 p673
- (14) 「裁縫所教師の業績を讃える生徒代表挨拶」明治24年(君津市史編さん委員会『君津市史 史料集Ⅳ 近代Ⅱ』君津市 1994)
- (15) 木原律子氏のご教授による。墓石には
(表)「貞柳院観月一寿居士 嘉永五子十月二十八日 貞順院観山妙寿大姉 安政四丁巳八月十一日」
(裏)「插花門人一百余 安原三左エ門」と刻まれている。
- (16) 川崎喜久夫 『筆子塚の研究』多賀出版株

- 式会社 1992 p431
- (17) 川崎喜久夫 『筆子塚の研究』多賀出版株式会社 1992 p70
- (18) 深谷昌志 『良妻賢母主義の教育』黎明書房 1998 (『増補 良妻賢母主義の教育』1981の復刊)
- (19) 千葉県教育会『千葉県教育史』巻一 青史社 1979 (1935年の復刻)